

パウル・ドイッセンと姉崎正治

—ドイッセンの姉崎宛書簡をめぐって—

深澤英隆

宗教学研究室には、諸外国の学者より、研究室の初代教授姉崎正治に宛てられた書簡がかなりの数残されている。その中には、後に岸本英夫の師ともなったハーバード大学教授 James Woods のほか、William James や Ernest Hocking などといった非常に著名な学者からの書簡も散見される。しかし姉崎との結び付きからして最も重要なのは、そのドイツ留学時代の恩師であった Paul Deussen からの二点の書簡であろう。短いものながら、両書簡とも、ドイッセンと姉崎との交友を窺わしめるものである。以下にまず、書簡の背景をなす事実について簡単にふれておくことにしたい。

Paul Deussen (1845-1919) は、著名なインド学者であるとともに、ショーペンハウアーの衣鉢を継ぐ哲学者であり、プフォルタ学院以来のニーチェの親友でもあった。姉崎が留学した1900年当時は、キール大学にあってインド学・哲学を講じていた。「梵語とショーペンハウエルを、一人の先生に習えんと言ふことを見当に」(1)ドイッセンを師と選んだという姉崎の言葉は有名であるが、このなげない言葉の背後には、ある世界観的な出会いとも言うべきものがあることに注意しておくべきだろう。ドイッセン自身は温厚な大学教授であったが、ニーチェからの深い影響、またウパニシャッドを始めとするインド研究や、ベーメ、ショーペンハウアーへの傾倒からも窺えるように、明らかにロマン派の流れを汲む、動的な意志の形而上学を自己の世界観とした人であった。もっとも、情にあつく、常に極めて朗らか(heiter)であったとされる人柄や、あらゆる知識人が好戦的熱狂に燃えた第一次大戦期にあっても頑固に平和主義と非暴力を唱えたという事実(2)からも分かるように、その人生観は、非合理主義がしばしば伴う否定的帰結を免れていたとも言え

よう。

ところで以上の特徴は、姉崎にもそのまま見出されるのではないだろうか。ショーペンハウアー〜ハルトマンの意志の神秘主義の正嫡の継承者であるケーベルの涵養を受けた姉崎は、東京帝大の卒業論文に、シュリングやショーペンハウアーを論じた「非合理主義の哲学」なる論文を提出する。その後宗教学の理論的建設の努力に向かう時期がはさまるが、周知のようにこれはむしろ例外に属するのであって、樗牛宛書簡にも見いだされるように、ドイツ留学時代に姉崎は、合理主義・功利主義的同時代への文化批判、科学主義・文献学主義への拒絶的姿勢を著しく強めている。帰国後の日本宗教学史研究を貫いているのも一種の生命主義的・人格主義的観点であり、また今日ではまったく読まれることのない一連の世界観的著作では、世界霊としての世界意志が自然と生命と社会とを動的に産出しつつ自己運動を展開していくといったヴィジョンが吐露されている。しかしその自伝からも読み取れるように、その育ち方と性格には、独特の健やかさ、朗らかさがある。実際、同時代の少なからぬ宗教学者・宗教哲学者が国家主義に傾いていったのに対し、姉崎は国際文化交流と国際平和のために内外で具体的な貢献をなした。その「非合理主義」は、権力意志の形而上学ではなく、実在のあらゆるレベルに展開される対立の運動を美と愛の内に止揚する類の直感に基づくものであった。もちろんこうした美的・宗教的近代批判の限界ということについては、また別に論じられなければならないだろう。ここではともかく、ドイッセンと姉崎との間に、世界観・人生観上の共通点があったことを指摘するに止めておこう。

姉崎は東京帝大文科大学助教授となった1890年の6月に、27才でキールに渡り、明るる年の3月までその地に留まって、ドイッセンに親しく

教えを受けた。自伝には、ドイッセン家の一員のごとく遇されたこと、眼病の悪化し始めた師にかわって『バガヴァッド・ギーター』を朗読し、ドイッセンがその場で口述する韻文の訳を書き留めていったことなど、師と姉崎との密接な交流が描かれている。(3) キールを去って後、姉崎はドイツ各地で学び、またヨーロッパ各地及びインドを回って、1903年6月に帰国した。最初に紹介する手紙は、年譜から察するところ、ライプツイヒに滞在中に姉崎が受けとったと思われる手紙である。当時ドイッセンは眼疾を病み、加療中であった。

ハンブルグ、1902年1月2日

我が親愛なる友、

興趣に富む御賀状、やはりドイチュマン教授の病院にて有難く頂戴しました。後々悔やむことのなきよう、今は出来るだけの事をしておくつもりです。全快ということは、今はなお期待できそうにありませんが、一步一步それに近づくことを願うのみです。

同封しましたのは、教授に口述筆記してもらった Inouyi? (4)宛の手紙です。これでいかどうかお読み頂いた上、正確な住所とともに折り返し御返送下されれば幸いです。住所の控えはキールに置いてきてしまいましたので。

子どもたちはとても元気です。月曜の早朝にはキールに出発できるものと期待しているのですが、火曜日には講義が始まります。イスラム……………

ともかくもお元気で。

ドイッセン教授夫妻より

第二の手紙は、二人の交友にとり重要な事柄に関係している。ドイッセンは上述のように、ショーペンハウアーの研究家というよりも、その形而上学を継承する思想家である。このことは、姉崎についても言える。あらゆる出来事・思想の背後

に自分はショーペンハウアーの宇宙的意志のヴィジョンを透見する、と姉崎はしばしば述懐している。その姉崎にとり、ショーペンハウアーの名著、*Die Welt als Wille und Vorstellung* (1819-44)の翻訳は、年来の課題であった。結局姉崎は、1910年より翌年にかけて、博文館から三巻本で、『意志と現識としての世界』のタイトルのもとにこの訳書を刊行することになる。序文は姉崎の思いを伝えている。

ケーベル先生に就いてショーペンハウエルを読み始めたのは、已でに早十六七年の昔、その後ドイッセン先生について、梵語や印度哲学を研究すると共に始終きいたのも、同じくショーペンハウエルの哲学。ワグネルの音楽に入神し、ニーチェの文に恍惚たる毎に、背後にはショーペンハウエルの思想が高く聳え、仏教の研究にも、その思想の奥に入っては、いつもショーペンハウエルの哲学に接触せざるを得ず、彼れの哲学は近世風の装いで、常にプラトーンの高遠な理想と印度の深刻な思想とを見せてくれた。余り多く自分について語るには似て居るが、今年この大哲入寂の五十年目に当たって、予てドイッセン先生に約束した事の一部を果して、この翻訳を公にし得るに至った自分の喜びは抑え難いから、ここに此事の昔語りをするのである。

以下に訳出する書簡は、姉崎が送ったこの訳書に対するドイッセンの礼状である。ちなみに、多くの不備があったこの訳書を、姉崎はドイッセンの新校訂版テキストに従い、30年後の1940年に改訂しているが(5)、その新版の序文でもドイッセンを親しく回顧し、次の如き短歌を書き留めている。

よそとせのむかししのびつ師のふみを ひねもすたどるゆかしわがわざ
文みてはおもかげのみか声ことば おもひうかべつよみもゆくかな

キール、1911年1月12日

親愛なる同僚にして友へ

重くのしかかる仕事の山を片づけて、漸くこ

ここに貴方の素晴らしい贈物、お送り頂いた『意志と現識としての世界』の訳書第1巻に、心よりのお礼を申し上げます。自分の思想が遍く地球をめぐり、その最も遠い地帯をも照らしだしていることを知ったなら、ショーペンハウアーはどんなにか喜んだことでしょうか。カタログからもお分りのように、私の方も大いにショーペンハウアーと取り組んでいます。『世界』正篇を含む我々の版⁽⁶⁾の第1巻が、2月に出版の運びとなります。これは1859年版の正確な再版なのですが、4つの補遺を付し、1819年、1844年、1873年の各版の異同を正確に表にしております。最後の補遺としてまた、230に及ぶ引用句すべての翻訳と出典とを示しました。ただ、ショーペンハウアーがカント哲学の批判を始めるにあたって引用しているヴォルテールの一句だけは、未だにその出典がつかめていません。

同時に私は、我が主著たる本の第4部⁽⁷⁾の準備に追われています。これはギリシャ哲学を内容としたもので、イースターの前には出るものと思われます。4月にはエリカとともに、ポローニャの哲学学会に赴くつもりです。彼の地で貴方とお会い出来たら、どんなに素晴らしいことでしょうか。2年前のオックスフォードとコペンハーゲンでの会議では、多くの人が貴方の事を尋ね、貴方のいらっしやっていない事を残念がっていたものです。必要な資金を支弁し、貴方を代表者として派遣するよう、政府の方に働きかけて見てはいかがでしょうか。4月の6日から11日にポローニャで開かれるこの会議に、日本が代表者を出さないというわけにはいきません。

奥様と三人のお子様にくれぐれも宜しくお伝え下さい。

貴方の忠実なる師にして同僚にして友なる

パウル・ドイッセン教授

る。この可愛い字で書かれた手紙も研究室に残されているが、今回はスペースの関係で残念ながら割愛せざるをえない。なお、海外の研究者よりの姉崎宛書簡については、大学院博士課程在学中で、現在キール大学留学中の川島堅二君の尽力により暫定的な一覧表を作製したが、なお半数近くの差し出し人の名が正確に判読しえないという状態であり、今回は一覧表の掲載は控えることにした。ドイッセンのもの以外の書簡についても、いずれ機会があれば紹介することにした。

- (1) 姉崎正治『新版 わが生涯』、姉崎正治先生生誕百年記念会、1974、7頁。
- (2) vgl. Fanz Mockrauer: Paul Deussen als Mensch und Philosoph, in: *Jahrbuch der Schopenhauergesellschaft*, Bd. 9(1920), S. 1-84, S. 6.
- (3) 姉崎上掲書、82頁以下。
- (4) 不祥。あるいは井上哲次郎のことか。
- (5) 改造社、1941以降。
- (6) A. Schopenhauer: *Gesamte Ausgabe*, 16 Bde., hg. von P. Deussen und A. Hubscher, 1911-42.
- (7) P. Deussen: *Allgemeine Geschichte der Philosophie*, 2. Bd, 1Ab, Die Philosophie der Griechen, 1911.

文中エリカとあるのは、ドイッセンの娘のことである。自伝には「エリカは自分がキールを去ってから学校に入り、幼稚な字で手紙をくれた」とあ